

(はじめに)

筆者は機微・2号の中で、「障害児・者の主体性が尊重される前に、まずその『存在』そのものが尊重される社会が必要十分条件と考える。そこにこそ、人間のアイデンティティの問題を考える原点があるような気がする。」²⁾と述べた。

また、筆者は2年ほど前からがんを患う方々を支援する「NPO法人 在宅緩和ケア支援センター - “虹”³⁾」に係わっている。がんに関係する文献、書籍に接すると、がんであることを宣告されて、しばしば自らの「存在」に戸惑う様子、また、支援者(Dr、看護師、家族、等々)も、当事者にどうその現実を受容してもらうかに苦慮・配慮している様子が伺われる。

こうした筆者の日々の営みの中で、障害児問題、がん問題だけでなく、人の「自己の存在」という共通の概念を、より明快に把握する必要性が浮かびあがってきた。

そこで、筆者は人間の自らの「存在」という概念構造について、一つの考察を試みた。コメント等をいただき、お互いに自らの「存在」を意識できればと願う。

(「存在」と「自己の存在」の概念構造 - 仮説 -)

人は穏和な日常生活の中では、そうそう自らの存在を意識することはない。しかし、病気になるったり、仕事がうまく行かなくなったり、周りの人とトラブルった時に、否応なく「自己の存在」を意識せざるをえない。

「自己の存在」という概念構造を考える手段として、とりあえず筆者は以下を参照した。

がんの宣告故に精神的に自らの存在に「苦しむ」方と長年係わってきたホスピス医の小澤竹俊⁴⁾は、「苦しみとは、希望と現実のギャップ」であり、「苦しみが和らぐとは、ギャップが少なくなること」と述べている。

この定義から、筆者はここでは「苦しみ」とは、我々日常の痛み、苦痛、不安、辛さ、

1) 仙台医療福祉専門学校(非常勤講師)、尚絅学院大学(非常勤講師)、宮城教育大学(非常勤講師)

心の痛み、悩み、等々の言葉のもつ概念を包括して考えるものとする。

また、「夢」とは、我々日常の望み、願い、夢、等々の言葉のもつ概念を包括して考えるものとする。

そうすると、「苦しみ（痛み、苦痛、不安、辛さ、心の痛み、悩み、等々）は、夢（望み、願い、夢、等々）と現実のギャップである」といえ、より具体的にイメージできる。

小澤竹俊が参考に行っている近代ホスピス創立者のシシリ・ソングス（イギリス・ロンドン）は、「苦しみ」の概念を以下のように分類している。

「肉体的な苦しみ」：病気やけが等による身体的な痛み（ex. お腹が痛い等）。

「精神的な苦しみ」：対人関係等から起こる悩み等（ex. 喧嘩や言い争いの後悔等）。

「社会的な苦しみ」：対社会的関係から起こる悩み等（ex. お金がない、成績が認められない等）。

「スピリチュアルな苦しみ」：自己の存在の意味の消滅から生じる苦しみ（ex. がんを宣告され「どうして私が？」 - 答えのない問いかけ - ）。

また、上記の「存在」の概念を以下のように「存在論の3つの軸」に分類・解説している。

「存在論の3つの軸」

「時間存在」：過去 現在 未来の時間の流れの繋がりで考える自分（ex. 過去にしっかりとした自分がいない時、安定した未来を思い描くことは難しい、等）。

「関係存在」：人の（自分の）存在は他者から与えられる自分（人との関係で自己の存在の意味を自覚。但し、「関係存在」を与えてくれる人を選ぶのは、あくまで本人 - 関係存在自体 - 。ex. 親、教師が子どもを理解し支えていると思っけていても、子ども - 自体 - がそれを実感しているかは別問題。）

「自律存在」：自己決定できる自分（自立できなくても自律する自分。ex. ベッドに寝たきりで排泄が自立できなくても、排泄等の時間を自分が選べる態勢）。

小澤竹俊は、上記「存在論」から、更にホスピス医の体験を交え、以下のように「自己

の存在」を気づくと、がんの人であっても苦しみから解放されることもあると述べている。

「自己の存在」

単に生きているのではなく、人間が生きていく上において欠かせない大切なものとは何かを考えること。

その大切なものが見えてきた時に初めて、人は苦しみの中でも生きていこう（存在し続けよう）とする真の力を得ることができる。

（考察）

「肉体的な苦しみ」、「精神的な苦しみ」、「社会的な苦しみ」は、自らの努力や周りからの支援で何とかギャップを縮め、苦しみを取り除くことが可能であるが、答えのない問いかけである「スピリチュアルな苦しみ」は、周りの支援を受けながらも自らが自らに問い続けなくてはならないことだけに、やっかいである。特に、それまでの生活のペースと異なり、急速に進行するがんの症状に付き合いながらのその時々問いだけに、苦しみも深刻といわざるをえない。

しかし、その自らの中での作業から、時間的に残り少ないがんの方も「関係存在」を自覚すれば、「生きていこう（存在し続けよう）とする真の力を得ることができる。」と、小澤竹俊は体験から述べている。

人は人との関係においてのみ、「自己の存在」を自覚できるようである。

こうした考察を提示すると、しばしば「語彙をもたない重度の障害児は、自己の存在を人との関係ということを思考できないのでないか」という反論が聞こえてこないでもない。

こうした疑問には、次の考察を提示したい。

フランクフル（アウシュビッツの強制収容所の中で書いた「夜と霧」の著者）の、ガンの方の生きる意味を、「その人が運命を知った上で取る態度によって、周囲の他人が力づけられるという意味がある」という言葉を借用すると、「障害児の生きようとする態度によって、周りの人が力づけられるという意味がある」ということになり、人は障害があろうがなかろうが、その存在する事実だけでも、十分に「存在」の意味があるということである。

つまり、人は「生命体としては、生きようとしてる」ということであり、その営みの中には、優劣は存在しないということであろう。

我々は障害児の教育活動に係わる中から、梅津八三⁵⁾のいう「生命活動の拡大方向（生きていくということは、どういうことなのか）を自らに問い続ける」ということ、具体的には、「他の子どもと較べることをあえてしないで、（障害児教育を含め人類一般における）教育的係わり合いを、たがいに輔け合う関係（相互輔生）」と捉えて、係わり合う作業が教育活動ということ、我々は学んできている。

筆者は、このように「関係存在」、「相互輔生」共に、相通じる思考概念を感じる。更にしばしば耳にする「双方向性」、「やりとり」、「係わり合い」等も、同様に関係論の中で考えられるように思う。

更に、介護保険制度実施の中で認知症の高齢者問題においても、「痴呆を病む（「存在」）とは、さまざまなギャップに気づき、それを乗り越え、修正する力を喪うということ」⁶⁾と捉え直し、その支援を工夫しようとする動きも見聞している。これとて、認知症を病む高齢者の自己存在の自覚の問題の側面を含んでいるともいえる。

（おわりに）

以上のように「自己の存在」概念構造について、一つの考察を試みた。

全ての人には寿命があるように、ヒトという名の生物の営みには、人間の意識だけは「どうしようもない、仕方がない」側面がある。一方、人類はしばしばこの自然の摂理ともいえる生理的レベルの肉体的問題さえもコントロールできないかと願い、その営みとして医学を始め、科学技術を発展させてきた。だがその営みに、自らの肉体的問題も何とかないのでないかと思うが故に、苦しみをより抱くようになったという側面もある。考えてみれば、「苦しみを抱く」という意識を司っている脳の働きも、肉体の一つの臓器の生理的レベル（シナプスのイオンレベルの伝達物質）の働きに過ぎないのだが。

今一度、人間は自らの肉体的存在に向き合い、一人一人が、自らの肉体的条件に意識がどうつき合っていくかという思考することも必要でないだろうか。

肉体的条件は、それこそ人一人一人異なるものである。障害もその属性の一つであろうし、がんを患い、認知症を患うのも、その属性の一つであろう。

いかなる肉体的条件、状況、事情であれ、自らを含め人という「生命体は、その生命活動を拡大しようとしているもの」であることを自らが意識することこそが、まず自らの存在理由を考える第一歩であることは確かなようであり、それは、「関係存在」の中でより確実なものとなるためにも、「相互輔生」ということであろう。言い換えれば、「生きる」

とは、そうした作業のことであろうと思う。

注)

「末期がん」：しばしば「末期がん」という語彙を耳にするが、「末期」とは、いわゆる医療サイドから診た症状に関する表現法であり、当人にすれば、いかなる症状、事情であれ、「生きる」ということでは、末期云々ということではない。それ故、当論の趣旨からも、「末期」の表現は使用しなかった。

「患者」：よく耳にする語彙であるが、英語の patient の和訳であろうが、patient には、「堪える、我慢する」等の意味もある。当論では、「生きる」ことを考えるには、何も「堪える、我慢する」ことが前提条件ではないので、「患者」という表現は使用しなかった。

「認知症」：従来は「痴呆症」、「痴呆」と表記されていたが、厚生労働省から順次法律等も「認知症」という表記に改める方針が出たので、引用文献以外は当論は「認知症」を使用した。

引用・参考文献

- 2)阿部幸泰：現代社会の障害児観の一面の検証 - 最近のマスコミ記事を材料として -、「係わり合いを考える」実践
検討会報告書「機微」2、1-3、宮城教育大学障害児教育講座・藤島研究室、2004.
- 3)NPO法人 在宅緩和ケア支援センター - “虹”HP：<http://cen.web.infoseek.co.jp/>
- 4)小澤竹俊：苦しみの中でも幸せはみつかる、扶桑社、2004.
- 5)梅津八三：心理学的行動図、研究紀要創刊号、重複障害教育研究所、1976.
- 6)小澤 勲：痴呆を生きるということ、岩波新書、2003.